



いさよひ物語

百五十四大  
W  
911.14  
H  
M

911.14  
H

和歌四天王之内淨弁



高辻殿遺長門

いさよひ物語  
全一冊



60222



此ハ今ハ十六の上ハカミ井に  
 可クハ月を打受てじうし  
 ともつーくはせいーくはうぬい  
 にしめ材がひいてくらすま  
 けしきうわ用とういんあ  
 若くはあまらんとそなくもり此  
 不徳更つるまきし侍りぬ  
 寄月進  
 月より袖乃毛いづとせ  
 月より袖乃毛いづとせ



名古屋大学蔵

毛の御守り上を乃上すらの御月  
 とそとののあつやと有りとし  
 けり此にほつちりなり月命は  
 出らるゝとまゝぬむしとあまを  
 月をたはさるゝとまゝわの袖に  
 系はちまゝしの御あつや  
 月をたはさるゝとまゝわの袖に  
 ちまゝとまゝの御あつや  
 人とも月ゆゑなるゝとまゝ  
 出らるゝとまゝの御あつや

いとにぬ夜はる具のい  
 けり此にほつちりなり月命は  
 出らるゝとまゝぬむしとあまを  
 月をたはさるゝとまゝわの袖に  
 系はちまゝしの御あつや  
 月をたはさるゝとまゝわの袖に  
 ちまゝとまゝの御あつや  
 人とも月ゆゑなるゝとまゝ  
 出らるゝとまゝの御あつや

ふれく月をみるまにまに此  
うまをた見やぬいと結ぶとて  
有明の月のういえとほまは  
つれなきまはう此又の出るる  
といこころまいおれを命を  
系はいつらのたうら此は  
酒まの布とやの上のたうま  
ほら此もえと月うのこ  
わららまをいりくまらる馬  
まのうまう此月うの  
う此はにほらうくまぬく  
うえの後と有明の月  
系もまといとぬまのま  
たはるまはら此有明の月  
こ此のまをまうらとこま  
た此のまはゆくと命の  
ここのまは月まのまは  
まといらうらと入るま  
たのまを後と有明の  
月とまといと入るま

う此はにほらうくまぬく  
うえの後と有明の月  
系もまといとぬまのま  
たはるまはら此有明の月  
こ此のまをまうらとこま  
た此のまはゆくと命の  
ここのまは月まのまは  
まといらうらと入るま  
たのまを後と有明の  
月とまといと入るま

此の地名を考へていふに、  
 こゝに於て有明の月  
 わしはちよと申す事なり  
 志す所ありてのありし  
 七月の有明の月  
 此の地名の考へていふに  
 有明の月と申す事なり  
 此の地名の考へていふに  
 有明の月と申す事なり  
 此の地名の考へていふに  
 有明の月と申す事なり



此の地名を考へていふに  
 こゝに於て有明の月  
 わしはちよと申す事なり  
 志す所ありてのありし  
 七月の有明の月  
 此の地名の考へていふに  
 有明の月と申す事なり  
 此の地名の考へていふに  
 有明の月と申す事なり  
 此の地名の考へていふに  
 有明の月と申す事なり



あそびさしむる月乃るうらなふにのこ  
 らぬ年とせぬうき年とせぬらん  
 我意をじつとてなすにむし月の  
 中たんとくく年ちつとせぬらん  
 とくくうらなふ年ちつとせぬらん  
 けのよきうらなふ年ちつとせぬらん  
 又いほとせぬのせぬ月乃有明り  
 みのうらなふ年ちつとせぬらん  
 じつとあそびさしむる月乃有明り  
 有明り月乃とせぬらん

我うらなふ年ちつとせぬらん  
 何んあそびさしむる月乃有明り  
 月乃有明り月乃有明り  
 出人のうらなふ年ちつとせぬらん  
 何んあそびさしむる月乃有明り  
 何んあそびさしむる月乃有明り  
 何んあそびさしむる月乃有明り  
 何んあそびさしむる月乃有明り  
 何んあそびさしむる月乃有明り

見下をるを物か(とやう歌人乃  
 こころおのうまきと月にならけい  
 人よこころうらみとくやと南のま  
 わすれぬにさしこころうら  
 ねとくはしほひまはらわぬを  
 うらみとくやと月にならけい  
 あまの夜のはらみとくやと  
 けふの待しこころをほし  
 せがみとくやと月にならけい  
 うらみとくやと月にならけい

うらみとくやと月にならけい  
 けふの待しこころをほし  
 せがみとくやと月にならけい  
 うらみとくやと月にならけい  
 けふの待しこころをほし  
 せがみとくやと月にならけい  
 うらみとくやと月にならけい  
 けふの待しこころをほし  
 せがみとくやと月にならけい  
 うらみとくやと月にならけい  
 けふの待しこころをほし  
 せがみとくやと月にならけい



いろなるまもなりこめいりし  
 人ともいふはわにこも  
 系くしぬてあきしひわかた  
 うくしむらひおひきりぬ  
 田んこくはきりぬいふ  
 うきくわりのまをぬ  
 うたかひかきぬまのま  
 かわくくはくわいぬ  
 はれぬかきぬまのま  
 こぬなる月の有明はく

ひる書くならむに月をあめい  
 きてくしむらひぬまのま  
 まあつてねにぬまのま  
 珠一白の月かろく  
 雨まのりひぬまのま  
 こめいりしむらひぬまのま  
 月のまに身をぬまのま  
 かくぬまのりひぬまのま  
 あきくしむらひぬまのま  
 青のりひぬまのま

俄因三句のまのま

山乃くのていけいの月をうくし  
 ずてうらやめやくいさよひ此  
 を此とせん月をうけしをうけし  
 ありおかしうていさよひをうけし  
 されど人の袖のちかきうらやま  
 やいさよひをうけし月をうけし  
 ちかきうらやまのうらやま月を  
家老のちかきうらや  
 りていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし

ありていさよひをうけし月をうけし  
 まいさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし  
 いさよひをうけし月をうけし  
 おかしうていさよひをうけし月をうけし  
 我をうけし月をうけし月をうけし  
 まいさよひをうけし月をうけし  
 おかしうていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし  
 ありていさよひをうけし月をうけし

右七十一首

寄雲意

系議為家

一乃秋小出ふの也に深は下  
 春のえつとくく入や云一花  
 急雨のうがう平紙合出つて世  
 正れとほあはし雲の思ふふ  
 一と云雨れ入ふあふれか  
 きのゆつと利此雲乃てひ  
 待たれしうははつる雲のま  
 雨ぬがうえ乃とれうのれお

高此内よふ雨 念の地雲れ  
 り雨ふ危うくなまらぬお  
 雨しはれふしめくとき天雲乃  
 系はゆつたも身は決られ  
 雨りくく入ふ急うもなれ雲は  
 春ううとるやとれぬ出つてハ  
 急れしぬ入乃ふはう雲くハ  
 我ううとれぬとれなるうき  
 石八首之録系為家卿  
 寄雲意 申すハ

ほろりふしと秋み雨れあはれ  
あはれこのまゝてをねむる

寄葛窓とす

秋をよにきほのく葛のまゝてあは  
うらみこゝろ(ねむる)あはれ

寄竹窓とす

をのまゝれ秋乃とこゝろのこゝろ  
ねむるあはれはうらみこゝろ

寄女高花窓とす

をのまゝ(女高花)あはれ

あはれあはれとこゝろあはれ

寄藤窓とす

あはれあはれとこゝろあはれ

寄竹窓とす

あはれあはれとこゝろあはれ

寄木窓とす

あはれあはれとこゝろあはれ

寄秋意 十季

初瀬川もよもあはれ風あつてし  
去るやうつら二年とら秋

寄松意 十季

そけくは乃も川かよもあはれ  
じうは八尺一と思ひや

寄鳥意 十季

あもあはれ乃をりかた水浪の  
立こたすよ我名なり季あ

寄泉意 十季

我二ハ乃をりかた清水若て  
せはあもいふは此かこれ

寄池意 十季

あや乃池のみとまははあはれ  
去るにや袖乃うらたてあはれ

寄江意 十季

あはれこいり入は乃水あはれ  
あはれあはれあはれあはれ

寄湖意 十季

うらやあはれあはれあはれあはれ

しららふ ぬをがしりさりなる

寄河邊

去るそそふとのけしきまはる川  
君うの便入いそぬあつと

寄淡島

たよふとまねにうふそあなれ  
ともらとあぬますうのれ

寄海邊

ふのくはむあふのむくつあ  
人の志をてしむりまてなるん

+

寄歎息

約乃市のけしきうとくあまはら  
くみまの志をぬ甲とからま

寄精進

けしきはらうふあはるそがけ  
ゆえらうとあましくあはるん

寄虫意

そくぬくがふそあれとてあま  
だれあううはらあはら

寄蜂意

わられて一々おちく草の葉に  
うまけてまよふゆらふのあつは  
寄人恋 いと

一とくにうたはるまをばけりか  
有りこころをうたふはらば

寄身恋 み

みと志しぬおのれをなほありん  
うたはるまをばけりか

寄心恋 み

おとねかきもたてなほありん

はねをふりてあつはらば

寄情恋 あつは

見ればいふまをばけりか  
うたはるまをばけりか

寄夢恋 い

おとねかきもたてなほありん  
いまはつとれぬらなほありん

寄枕恋 い

志きくまをばけりか  
おとねかきもたてなほありん

寄楚靈 山

いづつにゆくもさうかたむしりた  
の先とあつたみちほくしりた

寄木靈 山

果て交まひし身がかれぬやう  
なみちのちかへりかたむしり

寄奴靈 山

うかきまへにひさしけしきな  
とけぬまへにけしきな

寄常靈 山

いふ乃志の帯れり

我のよはひの帯れり

寄布靈 山

よとよにひねあひて我を  
そくひつてよとよの細布

寄糸靈 山

あまのこころまはるは  
よのけりいとの帯れり

寄鏡靈 山

鏡とくちしほくしりた



を山鳥のうらみあつて

寄中庭 書

あふとぬくしらをまうし  
あそれちるべ北あか下

寄夕庭 見

とくろわねやうみんあつて  
我にまひらぬはるさち

寄玉庭 をほ

をうけぬいさきをほ  
ふにさうまはあそれちる

寄箱庭 しこ

ふらやう鴻う子みま  
わうめり夜中の疾は

寄繩庭 あは

お地の鳴とゆい小ま  
いさくく北の城は

寄船庭 ふね

う北あつて  
あか小舟うはは

寄細庭 あひ

くみみ乃ひくくあまの袖は  
さしうみぬ後のまろそぬ

寄道遠と内

あまのふかさをいふまゝあつた

たれゆく仲ハ雨乾う後う

寄遠と

ひもりぬる霜定乃ぬのひ

秋ふあけぬくはれりさる

寄水遠と

さしは君のほひのし

あまのふかさをいふまゝあつた



いさよひ物語

80813

星符十六枚

